

すっかんぽ

1994年 10月号

ボダイジュ

～修学旅行裏話～

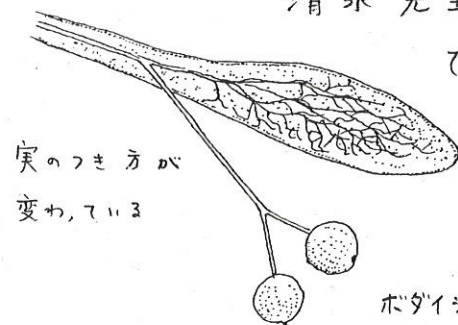
と タラヨウ

修学旅行 4日目の 10月14日、私と K 先生、F 先生の 3人は、京都 嵯峨野の寺々を タクシーで回っていた。ちょうど 清凉寺というお寺の本堂を見学し、外に出たあたりで、運転手のおじさんが、一本の木を指さした。

「ほら、これが、ボダイジュ（菩提樹）ですわ。」 一瞬、K 先生の目が輝やいた。「お釈迦様が、この木の下で悟りをひらいたんですわ。ほら、実がぎょうさんなってるで、しゃろ。この実から、^{じゅず}数珠をつくるんですわ。」 K 先生は、ちょうど世界史で、その辺のことをやっているらしかった。よく見ると、確かに、実がたくさんなっていて、大きさ、形、色といい、なるほど数珠がつけそうな雰囲気である。「生徒に見せてやろう。」そう言て、

清永先生と私は、葉っぱと実を少しもらって、いくことにした。

我々は、やがて嵯峨野を後にし、大徳寺の興臨院へと向かった。



実のつき方が
変わっている

ボダイジュの実

堅くて、カッターの刃では、半分に割れなかった。

興臨院は、この時期、特別公開をされていて、案内役のおじさんが、いろいろと説明してくれていた。庭園の説明が、終わりに近づいた頃、おじさんは、どこからか、葉っぱをとりだしてきた。「あそこに植えられている木は、^{バイタラジュ}貝多羅樹といって、古代印度では、葉っぱに ^{おもん}経文を書き写すのに用いられました。」おじさんの説明に、清永先生の目が再びキラリと輝くのを私は、みのがさなかった。先のとがった竹の筆でこすると、字が浮きでてくるのだ。それで、実際に、字が浮きでた葉っぱを、みんなにみせてくれていた。回ってきた葉っぱは、日本では、タラヨウと呼ばれている木の葉だ。た。「そうだ、たのか。タラヨウは、古代印度でも使われていたのか。」

K 先生と私は、このおじさんの説明に、深く納得し、「ありがたいお話もきかせていただきました。という満ち足りた気分にな、てしまったのである。K 先生は、私がトイレに行っている

間にも、おじさんに、葉っぱのことを、さらに、くわしく

たずね、木から葉っぱをとって、すぐに、

書かないと、字が浮きでてこな

いことも、つかんでいた。

表

この入りに、
隠された
真実

があることを

知、たのは、栃木県に、

もど、てからであ、た。

ウラにつづく

ボダイジュと タラヨウ

古い都にふさわ

しい出会いに

我々は、

充実し

た一日

を送、

たのだ、

たが

←

裏

裏側は

白、ほく

圧力を加えると

黒変する、

これを「死環反応」

という。

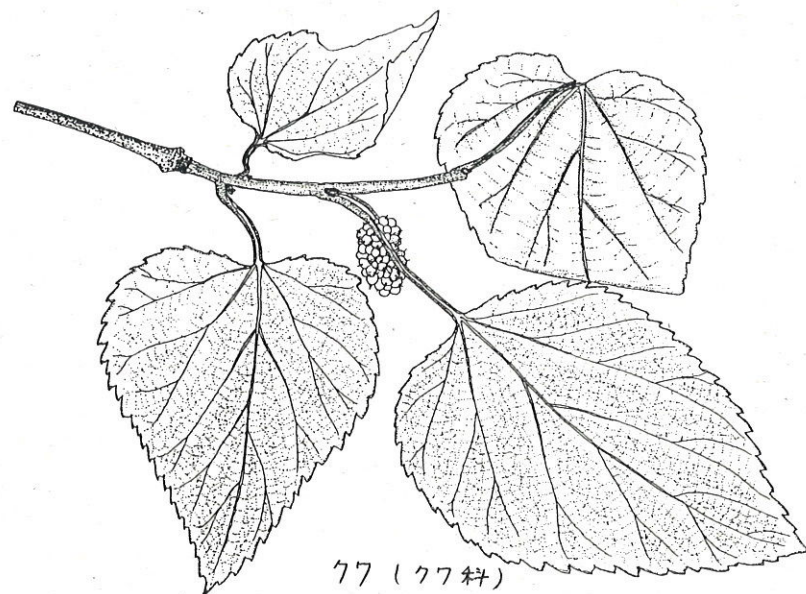
1994. 10. 17

(佐野市内の寺院にも植えていた)

※ 実物の約 $\frac{2}{3}$ の大きさ

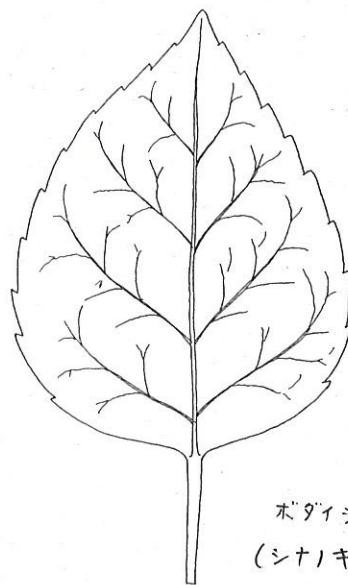
真実 その1 “ボダイジュの巻”

・家で植物図鑑で、ボダイジュを調べてみたら、こんなことが書かれていた。「……釈迦が木の下でさとりをひらいたという菩提樹（漢名）は、インドボダイジュで、本種とは別なもの……」
 そ、そんなバカな……。今までの喜びは、何だったの……。
 そこで、百科辞典などで、ボダイジュに潜むカラクリを明らかにしてやろうと思った。すると意外な真実が浮かび上がったのである。
 釈迦がさとりをひらいたインドボダイジュは、インドやスリランカ原産のクワの仲間で、熱帯性の植物だった。そのため、仏教が広まった中国では、気候があわなくて育たなかった。そこで葉の形がインドボダイジュに似ていた、全く別の植物をボダイジュとして代用したのだそう。ちなみに京都で見たボダイジュの葉とインドボダイジュと同じクワ科のクワの葉と比べてみてほしい。なんとなく、似ているような気がする。



クワ (クワ科)

1993. 7. 21 南会津にて



ボダイジュ
(シナノキ科)

1994. 10. 16

日本へは、1190年に、栄西上人が中国の天台山万年寺からボダイジュの種子を持ち帰り、植えたという記録が残っており、これは、インドボダイジュではなく、ただのボダイジュであつた。

ところで、インドボダイジュの種子は、小さく、とても数珠にはできないことから、数珠として使われたのは、ボダイジュ以外には考えられない。

つまり、最初は、お釈迦様とは無関係だった樹木が、葉の形が似ていることから、本家ボダイジュの代用として用いられていくうちに、いつのまにか、本家以上に仏教の世界になくてはならないものになってしまったのであつた。

真実 その2 “タラヨウの巻”

“古代印度で経文を書くのに使われた、貝多羅という植物は、日本には存在しないヤシの仲間で、日本にあるタラヨウではなかった。” がーん。まあ、またしても。

タラヨウは、貝多羅の葉のように、文字がかける、という共通点から“多羅の葉”にちなんでタラヨウ（多羅葉）と名付けられたのだそう。しかし、日本では、このタラヨウが寺院の庭などにさかんに植えられていることから、先のボダイジュに通じるものがあるのでは、と思われる。

ちなみに、ハガキ（葉書き）という言葉は、このタラヨウに字を書いていったことに由来するそう。今でも、葉、はに字を書いて、切手をはれば、“定形外”として出すことができるのだ。